

受領者投稿

研究費獲得への道

(財) 東京都医学研究機構 副参事研究員 原田 慶 恵
東京都臨床医学総合研究所 (第10回受領者)

私は平成4年秋から平成9年の秋まで科学技術振興事業団（現在は科学技術振興機構）のプロジェクトの研究員だった。当時は、科学技術振興事業団の研究員は科学研究費や財団などへの研究費の申請を行う資格がなかったので、その間自分で研究費を手に入れるために申請書を書くことは全くなかった。また、自分で研究費を手に入れる必要もなかった。今考えるととても恵まれた研究環境で、とにかく研究のことだけ考えて、ひたすら実験する毎日だった。プロジェクト終了後、平成10年の春、慶應義塾大学工学部物理学科の木下一彦先生（現在は早稲田大学工学部教授）の研究室に専任講師として採用して頂いた。木下先生は当時、科学技術振興事業団のプロジェクトのチームリーダーだったので、研究費は潤沢にあった。しかし、ここで私にとってちょっとショックな出来事があった。木下研の博士課程の大学院生がコンピューターを買いだと言ったとき、木下先生がそれを許可しなかった。すると、この大学院生は「それなら、自分の科研費で買うからいいです」と言ったのだ。この学生は当時、学術振興会の特別研究員で自分の科学研究費を得ていたのだ。この言葉を聞いたとき、いろいろな意味で、自分の研究費を手に入れることの大切さを痛感した。もちろん私はそれまで研究費を申請する資格がなかったのだから、そのとき自分の研究費というものがなくても仕方がなかったのである。また、木下先生はそのことを気遣って、事前に研究費の一部を私の自由に使って良いお金として与えてくださっていた。しかし、やはりそれに甘えてはいけなかった。それから私は研究費獲得のためにたくさんの申

請書を書いた。そのうちの 하나가平成11年度立石科学技術振興財団助成金への申請だった。助成金を頂けることに決まって、非常にうれしかったのを覚えている。それからま

もなく、私は平成12年春から現所属の研究所に研究室を持つことになった。自分の研究室を持つということは、研究費を自分の力で獲得し続けなければならないということの意味する。その時独立する決心がついたのは、当時、科学研究費を獲得していたことや立石財団から助成金を頂けたことに困っている。研究室の立ち上げは思った以上に大変だったが、新しい成果も出始め、今は毎日楽しく過ごしている。これもあの時助成金を頂いたおかげと、感謝している。

